

[アトリエ インカーブのビジョン]

**アトリエ インカーブは
知的障がいがある方の作品を
現代を生きる人が生み出すアート＝『現代アート』
として発信しています**

アトリエ インカーブ（以下：インカーブ）では、知的障がいがある方の作品をアール・ブリュット、アウトサイダー・アート、障害者アート等の名称でカテゴライズしません。現代を生きる人が生み出すから「現代アート」。ゆくゆくは、この「現代アート」ということさえ言わずに、彼らの作品が、より広く多くの人々に鑑賞、議論され、美術市場で売買されてほしい。それが社会福祉法人としてのインカーブの理想です。



アトリエ インカーブは、社会福祉法人素王会の事業本部として 2002 年 9 月に大阪市に設立されました。現在、28 名の知的障がいがある方がアーティストとして所属しています。

インカーブ設立当初、所属アーティストの作品は「障がい者」ということ抜きにみてもらえませんでした。私たちは、作品の芸術性を問いたく、2005 年にニューヨークのギャラリーで発表しました。作品は、障がい者ということを唱わずに鑑賞、購入され、芸術性が認められたことを実感しました。

かく言うインカーブも「アール・ブリュット」の英語訳である「アウトサイダー・アート」として発表していた時期がありました。歴史的・芸術的に評価の定まっていないものに対して名称を付けることで、作品を扱うことに安心感を付与し、日本特有の「障害者アート」と名付けられることを回避する意図でした。

一方、「アウトサイダー・アート」は、ヒューマニズムの観点から「何に対するアウトサイドなのか」と最近欧米で差別的と認識されてきています。インカーブも含む社会福祉法人は、ユニバーサル社会を実現することが責務のひとつであると考えます。アール・ブリュット、アウトサイダー・アート等、カテゴライズする名称から脱却し、障がいがある人だけに特化した新たなハコモノではなく、既存の美術館に作品が収蔵されることが、ユニバーサルであるとの思いに現在は至っています。

ニューヨーク近代美術館（MoMA）には、アール・ブリュットのアーティストとされるヘンリー・ダーガーなどの作品が収蔵され、何の区別もなく展示されています。インカーブでも、所属するアーティストの作品が、障がいの注釈なしに広く多くの人々に鑑賞、議論、売買されることを望んでいます。

[アトリエ インカーブの事業展開]

創造性豊かな知的障がいがある方が
『アーティストとして独立』することを目指します



国内外の現代アートのアートフェアに出展
作品を販売しアーティストの収入になっています

アトリエ インカーブは、日本最大の美術見本市「アートフェア東京 2013」に、社会福祉法人として初めて出展しました。今後も国内外のアートフェアに出展・出品し、アーティストの収入確保に努めます。

また、平成 21 年度よりインカーブのクリエイティブディレクター今中博之が「大阪府アートを活かした障がい者の就労支援事業企画部会（以下：府企画部会）」副委員長等を務め、創造性豊かな知的障がいがある方が、アーティストとして独立するための提言を行っています。



府企画部会の提言をもとに、大阪府が「大阪府現代アートの世界に輝く新星発掘プロジェクト 2012 公募入選作品展」を開催しました。建畠哲氏（京都市立芸術大学学長）、秋元雄史氏（金沢 21 世紀美術館館長）、南畠宏氏（女子美術大学教授）が、大阪府下から集まった、障がいがある方による作品約 720 点の作品審査を行い、最優秀賞はじめ各賞を決定。受賞作品による展覧会が大阪府立現代美術センターで開催されました。その時の図録『感性の王国-完全なる自由へー』からの言葉をご紹介します。

◎『確かに「障がい」という言葉には慎重な歩み寄りが求められます。「障がい」には様々なケースがあり、それをひとつの響きの中に押し込もうとするには相当の無理があるからです。そして、そもそもこの「障がい者」という言葉が、世界のどこにも存在しない、幻想としての「健常者」と対をなすように想定されたものでありながら、（ありもしない）健常とされる世界の美術を、これまでただの一度も「障がいのない者のアート」などという呼び方をしたことがなかったことを思い出すにつけ、この「障がい」という響きの中に内包されてきた未整理の意図について、私たちは改めて慎重にして本質的な関わりを模索しなければならないと思われるのです。』

—女子美術大学教授 南畠宏

◎『障がいのある方が制作された創造性豊かな芸術性の高い作品を現代アートとして評価し、アーティストへの道を拓いていこうとする取り組みです。』—大阪府知事 松井一郎

[課 題]

①

カテゴライズ（分類）から インテグレーション（統合）へ

アール・ブリュットのアーティストとされるヘンリー・ダーガーやビル・トレイラーなどは、ニューヨーク近代美術館（MoMA）に、何の 카테고리 分けもなく展示・収蔵されています（*下記 URL 参照）。2012 年には、MoMA の隣に位置し、アール・ブリュット作品を含むフォーク・アートを専門に扱う「フォークアート・ミュージアム」が閉館しました。現在日本には、「現代美術」と名のつく、公費によって運営されている美術館が 10 ヶ所を超えます。アール・ブリュットに限定せず、現代アートを扱うこれらの既存の美術館を中心に、作品を分け隔てなく調査・収蔵・保管・展示することをめざし、学芸員に理解を広げ、そのための予算を投入することが必要ではないでしょうか。

（*参考 URL）ヘンリー・ダーガー http://www.moma.org/collection/artist.php?artist_id=28600

ビル・トレイラー http://www.moma.org/collection/artist.php?artist_id=7464

②

福祉現場に アート・デザインに長けた人材を

知的に障がいがある方によって作られたものは、作品としてその価値が見いだされないまま、廃棄されることも少なくありません。作品が散在、廃棄されることを防ぐためには、福祉現場（施設や居宅介護）のスタッフが、それらに美術的価値を認め、保管・発信していかなければなりません。現在の福祉現場のスタッフは、アート・デザインについて学んだ経験もなく、日常生活を介護・支援することに手一杯になっています。福祉とアート・デザインの両輪を備えた優秀なスタッフを育成し、福祉現場の仕事に魅力を感じてもらうことが急がれます。具体策として、美大・芸大の学生への興味喚起として講演会やインターンシップを行う、福祉現場スタッフにアート・デザインを学ぶ機会を提供する、などが考えられます。

[組織図]

